

能性の問題にも連なって行く。それは、彼が人間の罪性の自覚を通じてやがて恩寵を強調する、彼の人間理解の深まりに呼応しているように思われる。知識と信仰の問題は、こうして、単に認識論の問題としてではなく、彼の哲学的神学的人間理解の問題として、広いパースペクティブの中でとらえることが必要ではないかと考える。

提題

アウグスティヌスにおける信仰と知解

宮谷 宣史

アウグスティヌスは信仰と知解に関し体系的な論述は企てなかったが、しかし、両者の関係については多く言及している。以下、彼の基本的な考えをまとめて、議論の材料に供したい。

1 信仰について

1.1 人間は幸福、真理、最高善を求めている。アウグスティヌスにとりそれは三位一体の神である (C. Acad., I, 3, 9 : De tr., VII, 6, 12)。

1.2 人間はこの神を信じ、知解しようと欲している (C. Acad., II, 20, 43 : De mor. cath., 14, 24 : De tr., I, 2, 4 ; II, 13, 24 ; XV, 5, 7)。

1.3 信仰は神についての権威ある教え(教会、聖書、信条)を聞き、それを知解し、それに同意することから始まる。つまり、権威と理性が人間を信仰に導く助けとなる。しかし、一般には、権威が理性に、信仰が知解に先行するかたちをとる (De ord., II, 9, 26 : Tr. in Joh. ev., 22, 2 ; 27, 9 ; 15, 24 : Ep., 120, 3 : Enarr. in Ps., 118, 18, 3 : Serm., 43, 8)。

1.4 信仰が先行するのは、神の不可視性のゆえで、まず信じる以外になく、また神を完全に知ることが出来ないためである。この故に、信仰は見えないもの信じること、現存しないものの現在、と定義される (Tr. in Joh. ev., 40, 9 : De tr., XIII, 1, 3 : De praed. sanct., 5 : Serm., 43 : De sp. et litt., 54 : Enchir., 2, 8)。

1.5 信仰は、まず、人間が謙虚になり、意志により自らの魂を神に従わせること、次に生活の規範に基づいて生き、希望を強め、愛を育てることである。信仰は愛によって働く。信仰に生きるとき、信じているものが、光を受けて見え始める (De ag. chr., 13, 14 : Serm., 43, 2f. : Ep., 184)。

1.6 信仰は、神の働きと神に対する愛のゆえに、信仰対象の知解へと向う。それは、信仰の根拠を問うことであり、その内容が虚偽や空想でないかどうかを吟味するためであり、また、疑いを除去するためでもある (De mor. eccl. cath., 17, 31 : Tr. in Joh. ev., 18, 1 : De tr., VII, 6, 12 ; VIII, 5, 8 ; XV, 1, 1 : Ep., 120)。

2 知解について

2.1 知解は理性の働きである。理性は *sensus animae, motio mentis, aspectus mentis* などと見なされ、その働きにより *ratio inferior, ratio superior, falsa ratio, vera ratio* などと呼ばれる (Solil., I, 6, 12 : De quant. an., 27, 53 : De tr., XIII, 1, 4 : Ep., 120, 6)。

2.2 人間は *animal rationale* として、理性をもって知解する力を与えられている。

2.3 理性は神知解を欲する、神知解は英知界を知解の対象とすることである。不可視なる神を知解しうる根拠は三つある。まず、肉となったイエス・キリストを通して。次に、神によりその見えない性質が被造物に知られるようにされていること。更に、人間は *imago dei* として造られていること。

2.4 人間は神知解を欲するが、しかしすべての者が神を知解し、信じる訳ではない。それは、*imago dei* としての人間が本来の姿から変形しているからである。そのため、神の言による再形成が必要である (Serm., 43)。

2.5 人間の理性は罪に汚され、無力になり、ゆがめられているため、そのままでは神を知解する力がない。そのため、光の源なる神が人間の精神を *illuminare* し、*acies humanae mentis, oculi mentis* を見るようにしてくれる (Solil., I, 3, 8 : Tr. in Joh. ev., 27, 7 : De tr., XV, 27, 49 : Serm. 43)。

2.6 理性は神に与えられた光によって、神を知解できるようになる。そして、神を知解し、神を見ようと欲する。見神 (*visio dei*) が知解の最終目標である (Solil., I, 7, 14 : Tr. in Joh. ev., 22, 2 : De tr., XV, 28, 51 : Ep. 120, 2)。

3 信仰と知解の関係について

3.1 信仰は信仰内容について何故 (cur) という問いを含んでいる。この問いに対する答えを見い出そうとする働きが知解である。したがって、知解をとみなわない信仰はない、という意味で、信仰は知解を内に持っている。そして、信仰と知解は問いと答え、探求と発見という関係にある、とみなされる (De lib. arb., I, 2, 4 ; II, 2, 6, : Tr. in Joh. ev., 29, 6 : De tr., XV, 2, 2)。

3.2 信仰内容の知解は、単に理性による思索によるのみでなく、神に関する権威ある教え(聖書、教会、信条など)、真理の内的教示、主の戒に従う生活を通して獲得される(De lib. arb., I, 2, 4)。

3.3 信じる者になるためには、神について語られる人間の言葉を理性によって知解しなければならない (intellige ut credas の立場, Serm. 43)。そして、知解したことを謙遜と敬虔に結びつけ、信仰に導くのが vera ratio である (Serm., 43 ; 89 ; 118 : Ep. 120)。

3.4 正しい理性によって不可視的、不変的なものを知解しようが、res fidei (三位一体、受肉、復活など) をすべて知解することは出来ない。そこで、それらを伝える神の言を知解するためには、信仰が必要である (crede ut intellegas の立場)。

3.5 人間は知解できない神を信じるが故に、信じている神を知解しようと欲する。知解によって信仰対象を把握しようと努める。つまり、信じた神を知解しようとし、知解した神を信じ、その神を更に知解しようと求める (requaerere)。こうして、神を信じた者は神の知解を求め、神を知解したものは更に神を信じ、信じた者は更に神の知解を求めていく (De tr., XV, 2, 2)。

3.6 人間は知解したことを信じるが、信じていることを全て知解しない。したがって、人間は信仰しつつ思索し、思考しつつ信じるのがよい。神の神秘を信じつつ知解しようとするれば、credentes は intelligentes になる (De praed. sanct., 5 : Serm., 126, 1)。

3.7 人間は信仰によって神に結びつけられ、神の知解によって生かされる。信仰は人間を浄化し、知解は人間を充満する (Tr. in Joh. ev., 27, 7 ; 36, 7)。

3.8 人間は信じた信仰そのものによって多くを知解し、知解力は信じていること

を知解するのに役立つ、信仰は知解したことを更に信じるのに奉仕する。信仰と知解が共に働くとき、人間は内的に成長する (Enarr. in Ps., 118, 18, 3)。

3.9 神を credere することは神を videre することにつながり、また、神を intellegere することも、神を videre することにつながる (Tr. in Joh., 40, 9 : De tr., XV, 27, 49)。

提題 アウグスティヌスに於ける信仰の知解について

宮 内 璋

アウグスティヌスが信と知について語る時、「信ずるとは、^{ノイ}諾いを以て思惟することである (cum assensione cogitare)」(praed. sanct. II, 5) という基本的把握が、常に根底をなしている。即ち、信は、知と対比されてはいるが、知の展開という魂の基本的動向 (cogitatio) の一相として提示され、思惟が、信ずるというその特殊性に先立つより普遍的なはたらきとして先ず立てられ、そのはたらきの暫定的結実として信は位置付けられている。従って信は、知本来の相たる「達成」としてあるのではない。諾いという意志の (ノイ) 動向が顕在化するのはそのためである。そして知も又、信との対比連関という局面において考察されているために、及び得ず、達成されたものとしてはあり得ない域を示しつつ、思惟という動的な言葉によって語られているのである。即ち、この信の規定において限定されている思惟は、記憶にまで沈澱する知 (つてい) (nosse) の現実化として語られる思惟ではなく、それを背景としつつ、既に真に至り、真として現われている知の相、即ち知解 (intelligentia) に向うもの (co-agitatio) として信と言われているのである。信のこの基本的把握は、アウグスティヌスにおいて、知の展開に対応して三つの局面に沿って展開されていると思われる。更に、ここで信を繞る恩寵 (gratia) の問題も姿を現わしているのであるが、我々の持てるものはすべて神に由来するものであることが全体として述べられ、信について特に恩寵が強調されることはない。このことには十分留意する必要があると思われる。